

異邦の地マレーシア

伊藤美遙

(高70回)

東京外国语大学
国際社会学部マレーシア語科4年



●いとう・みはる
飯田市出身。高校では語学班に所属。大学ではアシカペラや海外旅行を楽しんだ。ゼミでは教育社会学を専攻し、大学院進学を目指して勉強している。教員免許取得中。趣味は料理、ピアノ。

「Cepat! Cepat! (急いで！急いで！)」

大学1年生の終わりにマレーシア語科のみんなで行った研修旅行を思い出す度に、せっかちな引率者のファリダ先生がいらっしゃる。17日間という短い日程の中で、マレーシアの首都クアラルンプールをはじめ、スランゴール州、マラッカ州、ジョホール州、クランタン州、ペラ州、そしてシンガポールまで足を延ばした。観光名所をまわりつつ、同時に4か所の家でホームステイをさせてもらひながら、現地の大学や機関を見学し高校や中学で交流活動をするとい

に滞在していた時は、ホストマザーが礼拝所での礼拝を特別に見学させてくれた。男女で場所が分かれているため、私は女性の部屋に入れてもらつた。真っ白な衣装に身を包んだ大勢の女性たちが一堂に会し、同じ方向を向いて、お祈りの言葉を小さくつぶやきながら頭を床につける祈りの動作をくりかえす。風がそよぐたびに女性たちの白いベールが揺れ、会場は神聖な雰囲気に包まれていた。礼拝が終わると隣の部屋で簡単な食事がふるまわれ、礼拝所は人々の交流の場としても機能していることを知った。

17日間という短い期間ではあつたが、ありのままのマレーシアを知つてほしいというファリダ先生の想いから、都市や観光地だけではなく地方も訪れた。それぞれの地域に独自の街並みや自然、食文化があり、マレーシアという国が持つ多様性を垣間見ることができた。しかしすべての地域で共通していたのは、マレーシア人の柔和で温かい性格だ。どの地域でも、日本人の私たちを笑顔で迎え入れ親切に対応してくれた。過酷なファリダツアーを乗り越えられたのは、彼らの優しさのおかげだった。

そんなファリダツアーから早くも2年が経ち、私は4年生になつた。本当は3年生の夏から1年間マレーシア

う、いくらなんでも詰め込みすぎなスケジュールであつたから、ファリダ先生が急ぐのも無理はなかつた。その過酷さで有名な通称「ファリダツアー」は、旅行というよりもはや修行だつた。

マレーシアは東南アジアの中央に位置し、マレー半島とボルネオ島の一部から成る常夏の国だ。人口は3千万人ほどで、マレー系・中国系・インド系といった様々な文化圏の人々が共存する多民族国家として知られる。空港から一歩踏み出ると、暖かい空気がムッと体を包む。街を歩く女性たちは髪を隠すための美しい被り物をつけていて、お祈りの時間になると、礼拝所（現地ではmasjid “マスジッ”と呼ばれる）からアザーン（礼拝の呼びかけ）が大音量で響き渡る。景色も匂いも聞こえる音も、何もかもが日本のそれとはまったく違つた。

言語の練習のために、ホームステイ先は4か所ともマレー系の家族だつた。どの家も歓迎してくれて、一緒に出掛けたり料理を教えてくれたりした。マレー系の人々はみなイスラム教を信仰しているムスリムであり、その生活にはイスラム教の文化が根づいている。ムスリムは1日に5回礼拝をする。基本的には家や職場で行つているようで、クランタンの家ではホストファザーが礼拝しているのを見かけることがあつた。スランゴール州

に留学する予定だつたが、コロナウイルス感染症拡大により状況が一変した。

授業はオンラインへ移行し、

サークル活動は

全面禁止。先が

見えない状況のなかで留学を断念することを決意した。

例年多くの留学生を迎えて、学部生の6割以上が長期



スランゴールでのホストマザー・ホストファザーと一緒に撮影された写真。左端が筆者。着させていたいはマレーシアの女性が身に纏うTudung(被り物)とBaju kurung(上下セットの服)

海外留学をする東京外国语大学にとって、コロナウイルスの影響は計り知れなかつた。多くの学生が、人生を左右する大きな選択肢を前に難しい決断を迫られた。苦労して獲得した留学資格を泣く泣く辞退して就活に奔走する人もいれば、大学を休学し、自己責任で外国に飛び立つた人もいる。私は、ゼミで専攻している教育社会学をさらに深く学ぶため、大学院への進学を目指している。

コロナウイルス感染対策に苦しむ日本と同様に、マ

レーシアでも予断を許さない状況が続いている。以前のように心置きなく人々が行き交える世の中が、一日でも早く戻つてくることを願つてゐる。